
山村 正樹 (やまむら まさき)



【書名】炭素文明論

【著者】佐藤健太郎

【発行】新潮社 (新潮選書)

人類の文明史を解説した本書であるが、文明史を化合物の視点からみているのが特徴である。香辛料の歴史を解説すると、大航海時代に胡椒が広まったとか、インドで唐辛子が発見されたとかいう話になるが、そこでいちいち辛味成分の化学構造式が出てくるのである。化学の式なんか見て何が楽しいのかと思うかも知れないが、式で書かれた物質が歴史を変えたと思うと感慨深い。また、式をよく見ていくと辛味成分にはフェノール構造が多いのだなという発見もある。やっぱり、何が楽しいのかわからないかもしれない。私は化学者なので楽しい。でも、化学の教科書で構造式だけ見ても無味乾燥かもしれないが、人類史の中と化合物がどう関わって来たかを見るの愛着が湧いてくるのではないかな。

【書名】ラブ・ケミストリー

【著者】喜多喜久

【発行】宝島社

ある日、主人公の前に不思議な少女が現れて主人公の恋の手助けをして、といったSF・ラブコメの娯楽小説である。似たような作品はいくらでもあるだろうが、作品の舞台が理系大学の研究室という点が他と一線を画する。いや、大学の研究室を舞台に作品も多々あるだろうが、実在する論文雑誌や化学物質が登場して、研究生活が恐ろしいほど細かく描写されている。ラブコメなので気楽に読めるが、同時に研究生活とはどういうものか感じることができよう。

【書名】人斬り以蔵

【著者】司馬遼太郎

【発行】新潮社 (新潮文庫)

司馬遼太郎はいくつもの大河ドラマの原作を書いている歴史小説家である。有名な作品は分厚い文庫なので読むのに時間がかかるが、この本は短編なの

で気軽に読めることだろう。タイトルは幕末の暗殺者、岡田以蔵からとったものだが、以蔵は暗殺者と思えないくらい情けなく醜い人物として書かれている。歴史のエピソードより、その時代の人間の内面に重きを置いているのだろう。歴史小説というと堅苦しく重い人間ドラマのような印象を持つかもしれないが、本書には馬鹿馬鹿しいエピソードも多い。歴史なんて人間の作るものなのだから、人間のやることは馬鹿なこと多いということなのだろうか。

【書名】 SNOOPY COMIC SELCTION 50's

【著者】 Charles M. Schulz (谷川俊太郎 訳)

【発行】 KADOKAWA (角川文庫)

スヌーピーというキャラクターはよく知られているが、何の作品のキャラか知っている人は少ないと聞く。スヌーピーは新聞四コマ漫画『PEANUTS』に出てくる犬のキャラクターだ。日本でいう『サザエさん』を思い浮かべてもらえばわかりやすいだろう。漫画を選ぶのは気がひけるが、時に考えさせられるセリフがあり、よく読むと深みのある作品である。この本の原著はもちろん英語である。英語というと躊躇するかもしれないが、四コマ漫画の英語は本当に簡単で誰でも読める。むしろ、英語の苦手な人が学習するのにも使えるかもしれないと思って選書した。今回の選書にあたり日本語訳版を買ってみたが、英語原作の下に日本語解説がしてあるだけだったので、訳版を紹介する。

【書名】 「婚活」時代

【著者】 山田昌弘、白河桃子

【発行】 ディスカバー (ディスカバー携書)

個人的なことを言わせてもらうのは恐縮であるが、私は結婚の遅かった人間である。結婚って本当にしなきゃならないものなのか？ どうやってするんだ？ そもそも結婚って何だ？ と思い悩んでいた時に取ったのが本書である。本書は社会学者による日本の結婚制度の解説と、現在の婚活サービスの紹介がされている。後者ははっきり言ってどうでもいいが、前者は色々と考えさせられる。一昔前の日本人は誰でも結婚できていたが、今は努力しないと結婚できない時代になった。結婚なんてプライベートなことしようがしまいが個人の勝手である。しかし、結婚しないよりはした方がマシな人生になるのだから少しは努力しなさい、ということだ。敢えてこの本を20歳前後の皆さんに勧める。歳をとってから気がついて遅いのだから。